

n vs. the Rest 型 2 値判別器を用いた ECOC の構成法とその性質

平澤茂一[†] 雲居玄道[‡] 八木秀樹[§] 小林学[†]

[†] 早稲田大学 [‡] 長岡技術科学大学 [§] 電気通信大学

1 はじめに

n vs. the Rest ($n \geq 1$) の 2 値判別器を複数個 (N 個, $N \geq 3$) 組み合わせることで多値 (M 値, $M \geq 3$) 分類を実現する ECOC (Error-Correcting Output Codes) 構成法 [1] を考える。 M 個のカテゴリを n 対他 ($M-n$) に分類する 2 値判別器は最も簡単な分類器である。ECOC 法は多値分類問題に誤り訂正符号の考え方を適用し、幅広い知識を活用して解決する一方法を与えている。本稿では、 n vs. the Rest の 2 値判別器を用いた ECOC の構成法を符号語表で表現し、得られた符号語の集合を nvR 符号と呼ぶこととする [2]。符号語の生成方法から、nvR 符号は非線形 (Nonlinear) 等距離符号 (Equidistant codes) であり、 $n = M/2$ の場合を除き、重み一定符号 (Constant-weight codes) になっている。さらに、nvR 符号を連接して Exhaustive 符号が得られるなど、興味ある性質を明らかにする。また、nvR 符号の持つ符号パラメータを求めその適用範囲を明らかにし、比較的符号長 N の小さな Simplex 符号、修正 Reed Muller 符号、Hadamard 行列から得られる符号 [3] などと比較する。

2 符号語表

2.1 符号語表の構成と性質

ECOC 構成法は M 行 N 列の符号語を列挙した符号語表 (Codeword Table) $W = [w_{ij}]$ により性質・性能が決まる。ここで、 $w_{ij} \in \{0, 1\}$ の 2 元符号を仮定する。 W の第 i 行を $\mathbf{c}_i = (w_{i1}, w_{i2}, \dots, w_{iN})$ 、第 j 列を $\mathbf{d}_j = (w_{1j}, w_{2j}, \dots, w_{Mj})^\top$ で表す。前者は第 i の符号語ベクトル、後者は第 j の判別器ベクトルである。ここで、 \top は転置を表す。いま、任意の長さ L の 2 元ベクトル $\mathbf{u} = (u_1, u_2, \dots, u_L)$ の要素 $u_l = 1$ ならば $u_l^C = 0$ 、 $u_l = 0$ なら $u_l^C = 1$ ($l = 1, 2, \dots, L$) とする長さ L の 2 元ベクトル $\mathbf{u}^C = (u_1^C, u_2^C, \dots, u_L^C)$ を \mathbf{u} の補元 (Complement) と呼ぶこととする。

明らかに有効な行列 W は、次の列ベクトルを含まない (列操作)。

- ① 同一の列ベクトル、② 全 0 および全 1 列ベクトル、
③ もし \mathbf{d}_j を含めば、 $\mathbf{d}_{j'} = \mathbf{d}_j^C$ となる列ベクトル^{*1}

2.2 Exhaustive 符号 [1]

長さ M の全ての 2^M 個の列ベクトルからなる行列を考える。ここから、列操作を行って得られる $M \times N$ ($N = 2^{M-1} - 1$) の符号語表は ($2^{M-1} - 1$ の組み合わせ) $(2^{M-1} - 1) \times N$ の符号語表となる。

Construction Methods and their Properties of ECOC using n vs. the Rest Type Binary Classifier

Shigeichi Hirasawa[†], Gendo Kumoi[‡], Hideki Yagi[§], Manabu Kobayashi[†]

[†] Waseda University

[‡] Nagaoka University of Technology

[§] The University of Electro-Communications

^{*1} 2 値判別器 \mathbf{d}_j と \mathbf{d}_j^C は、同一の分類境界を持つ。

$1, \log_2 M, 2^{M-2}$) Exhaustive 符号を与える。ここで、符号長 N 、情報記号数 K 、最小距離 D の符号を (N, K, D) 符号と表す。

[例 1] $M = 5$ のとき、 $N = 15$ 、 $D = 8$ の Exhaustive 符号の符号語表 $W_{\text{exh}}^{(5)}$ を式 (1) に示す。

$$W_{\text{exh}}^{(5)} = \begin{bmatrix} 0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0 \\ 0,0,0,0,0,0,0,1,1,1,1,1,1,1,1 \\ 0,0,0,1,1,1,1,0,0,0,0,1,1,1,1 \\ 0,1,1,0,0,1,1,0,0,0,1,1,0,0,1,1 \\ 1,0,1,0,1,0,1,0,1,0,1,0,1,0,1,1 \end{bmatrix}. \quad (1)$$

3 nvR 符号の性能

3.1 nvR 符号の符号語表の構成法

符号語数 (カテゴリ数) M 、符号長 N の nvR 符号の符号語表 $W_n^{(M)}$ は (a) $n = 1$ 、(b) $2 \leq n \leq M, n \neq M/2$ 、(c) $n = M/2$ の場合に分け、次式で与えられる。ここで、長さ ℓ の全 1 のベクトルを 1^ℓ 、長さ ℓ の全ゼロのベクトルを 0^ℓ 、 $k \times k$ の単位行列を I_k で示す。

いま、 $n = 1$ に対して $\tilde{W}_1^{(M)} = I_M$ 、 $2 \leq n < M$ に対して

$$\tilde{W}_n^{(M)} = \begin{bmatrix} 1^{N_1} & 0^{N_2} \\ \tilde{W}_{n-1}^{(M-1)} & \tilde{W}_n^{(M-1)} \end{bmatrix}, \quad (2)$$

$n = M$ に対して $\tilde{W}_n^{(M)} = [1^M]^\top$ を定義する。ここで、 $N_1 = \binom{M-1}{n-1}$ 、 $N_2 = \binom{M-1}{n}$ である。カテゴリ数 $M \geq 3$ に対し行列 $\tilde{W}_n^{(m)}$ ($m = M-1, M$) を用いて、nvR 符号の符号語表を以下のように構成する。

- (a) $n = 1$ のとき、 $W_1^{(M)} = \tilde{W}_1^{(M)}$ とおく。
- (b) $2 \leq n < M/2$ のとき

$$W_n^{(M)} = \tilde{W}_n^{(M)}. \quad (3)$$

- (c) $n = M/2$ のとき

$$W_n^{(M)} = \begin{bmatrix} 1^{N_1} \\ \tilde{W}_{n-1}^{(M-1)} \end{bmatrix} \quad (4)$$

とおく。式 (4) は Half vs. the Rest 符号 [4] の構成を表す。この場合、式 (2) における左前半の小行列と右後半の小行列の列は互いに 2 つの補元の組み合わせで構成されるため、2.1 で述べた列操作により左前半のみを残す。

[例 2] nvR 符号の例を示す。 $M = 5$ のとき、 $W_1^{(5)}$ 、 $W_2^{(5)}$ は以下の通りである。

$$W_1^{(5)} = \begin{bmatrix} 1,0,0,0,0 \\ 0,1,0,0,0 \\ 0,1,0,0,0 \\ 0,0,1,0,0 \\ 0,0,0,0,1 \end{bmatrix}, \quad W_2^{(5)} = \begin{bmatrix} 1,1,1,1,0,0,0,0,0,0 \\ 1,0,0,0,1,1,1,0,0,0 \\ 0,1,0,0,1,0,0,1,1,0 \\ 0,0,1,0,0,1,0,1,0,1 \\ 0,0,0,1,0,0,1,0,1,1 \end{bmatrix}.$$

3.2 nvR 符号の符号パラメータ

3.1 で示した符号語表の構成法より、容易に次の定理が得られる。

[定理 1] (nvR 符号の符号パラメータ)

$M \geq 3, 1 \leq n \leq M/2$ を与えたとき、符号語表 $W_n^{(M)}$ による nvR 符号の符号パラメータは次式で与えられる。

$$\text{符号長 } N = \begin{cases} \binom{M}{n}, & n \neq M/2; \\ \binom{M}{n}/2, & n = M/2, \end{cases} \quad (5)$$

$$\text{情報記号数 } K = \log_2 M, \quad (6)$$

$$\text{最小距離 } D = \begin{cases} 2\binom{M-2}{n-1}, & n \neq M/2; \\ \binom{M-2}{n-1}, & n = M/2. \end{cases} \quad (7)$$

また符号語表の構成方法から、次の結果が得られる。

[系 1] nvR 符号を連接して得られる符号は Exhaustive 符号である。すなわち、 M が与えられたときの Exhaustive 符号の符号語表 $W_{\text{exh}}^{(M)} = [W_1^{(M)}, W_2^{(M)}, \dots, W_{\lfloor M/2 \rfloor}^{(M)}]$ で与えられる。

[例 3] 例 2 に記した nvR 符号の符号語表を連接して $(15, \log_2 5, 8)$ Exhaustive 符号の符号語表 $W_{\text{exh}}^{(5)} = [W_1^{(5)}, W_2^{(5)}]$ が得られる。

[系 2] nvR 符号は非線形符号 (Non-linear codes) である。

[系 3] nvR 符号は等距離符号 (Equidistant codes) である。また、そのハミング距離は最小距離 D に等しい。

[系 4] nvR 符号は $n = M/2$ (M が偶数の場合) を除き、重み一定符号 (Constant-weight codes) である。このとき、一定重みは $\binom{M-2}{n-2} + \binom{M-2}{n-1}$ である。 M が偶数の場合には全 1 の符号語を持ち、重み一定符号とはならない。

4 nvR 符号の性能の比較

(1) nvR 符号を誤り訂正符号の一つとみなし、Simplex 符号、Hadamard 行列から得られる符号などの結果と共に、符号長に対する最小距離 D/N と符号化比率 r の関係を図 1 に示す。ここで、 $r = (\log_2 M)/N$ である。図 1 では、点○が上ほど訂正能力が大きく、右ほど効率が良い。

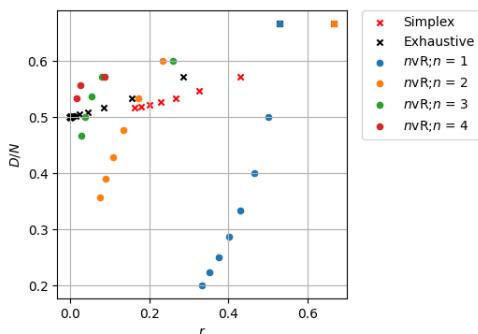


図 1 nvR 符号の誤り訂正能力

(2) 図 2 に Half vs. the Rest 符号、Simplex 符号、Exhaustive 符号について、図 1 の $D/N = 0.5 \sim 0.7$ の部分を拡大したものを示す。

5 考察

5.1 nvR 符号の訂正能力と適用範囲

(1) 図 1・図 2 より、nvR 符号は与えられた n に対し訂正能力 D/N が $n = \lfloor M/2 \rfloor$ の近辺、すなわち Half vs.

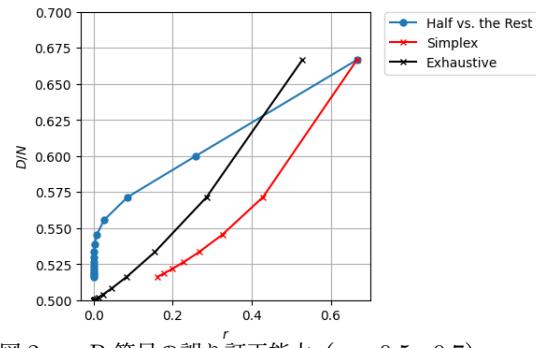


図 2 nvR 符号の誤り訂正能力 ($r = 0.5 \sim 0.7$)

the Rest 符号で最大値を取ることが分かる。 r は小となるが、nvR 符号の適用領域はこの辺にある。

(2) 漸近的な符号の訂正能力は、通常次式の漸近的距離比 $\delta(r)$ で論じることが多い。Exhaustive 符号のそれは

$$\delta_{\text{exh}}(r) = \lim_{N \rightarrow \infty} D/N = 1/2 \quad (8)$$

となり、 $r > 0$ で $1/2 + 0$ となる数少ない符号であり興味深い。

5.2 等距離性

符号語表の等距離性は、しばしば最適性を論じるときに注目される。Bayes 最適性 [5] や、理論的解析でその重要性 [2] が指摘されている。

6 むすび

今回は nvR 符号について、誤り訂正符号と見たときの性質を議論した。ECOC の実験的検討は今後の課題である。訂正能力 D/N の大(小)と分類誤り確率(カテゴリ復号誤り確率)の小(大)の評価は学習データ・テストデータの与え方や ECOC の復号法に依存し、必ずしも同じではない。人工データ、ベンチマークデータなどで検証する必要がある。

謝辞

本研究の一部は、JSPS 科研費 20K04462, 23K04293, 24K20833 の助成による。

参考文献

- [1] T. G. Dietterich, and G. Bakiri, “Solving multiclass learning problems via error-correcting output codes,” *Journal of artificial intelligence research*, vol. 2, pp. 263–286, 1994.
- [2] G. Kumoi, H. Yagi, M. Kobayashi, M. Goto, and S. Hirashima, “Performance evaluation of error-correcting output coding based on noisy and noiseless binary classifiers,” *International Journal of Neural Systems*, vol. 33, no. 02, p. 2350004, 2023.
- [3] 平澤茂一, 雲居玄道, 八木秀樹, 小林学, 後藤正幸, 稲積宏誠, “構成的符号化を用いた ECOC の一構成法(続)”, 第 84 回全国大会講演論文集, vol. 2022, no. 1, pp. 161–162, 2022.
- [4] H.-Y. Lin, S. M. Moser, and P.-N. Chen, “Weak flip codes and their optimality on the binary erasure channel,” *IEEE Transactions on Information Theory*, vol. 64, no. 7, pp. 5191–5218, 2018.
- [5] G. James, and T. Hastie, “The error coding method and pict,” *Journal of Computational and Graphical Statistics*, vol. 7, no. 3, pp. 377–387, 1998.